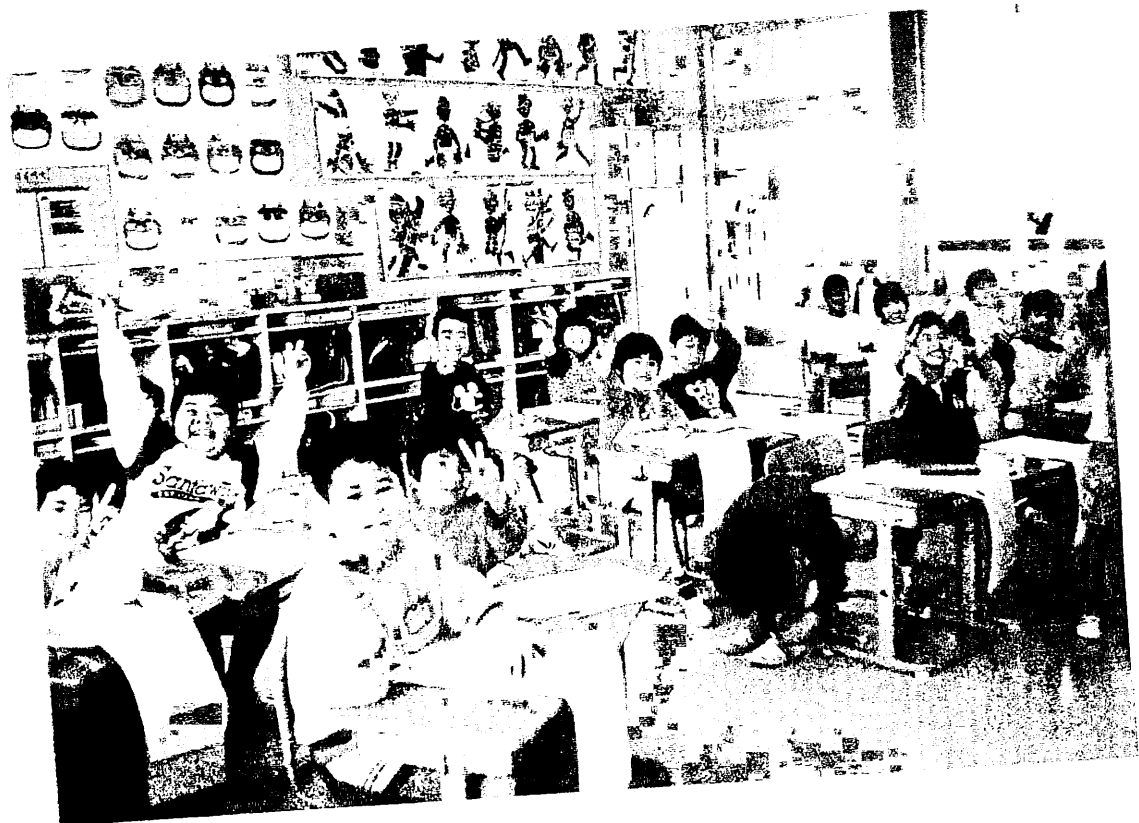


東 風

第七号

10 年 (1998) 3 月



南部広域行政組合
島尻教育研究所

絵画の寄贈

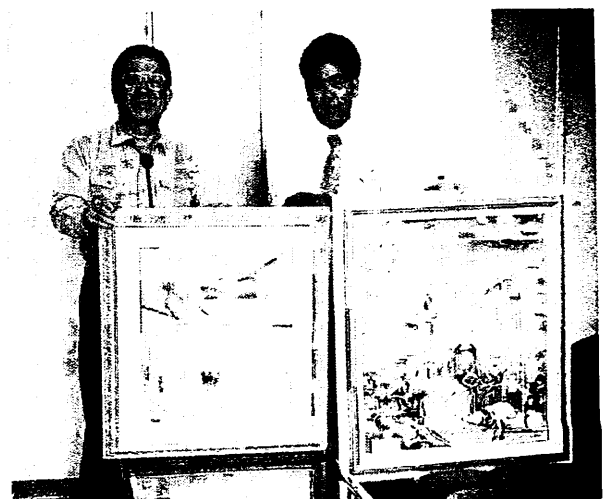
渡嘉敷中学校教諭の伊川治美先生より
去る3月14日に島尻教育研究所へ油絵を
2点寄贈していただきました。

「イドラ島の路地（ギリシャ）」と
「アムステルダムの土曜」です。

作者略歴

勤労者美術展	入賞	2回
沖縄県美術展	入選	3回
沖展	入選	4回

二科沖縄支部会員



目 次

- 随 想 「心の接点」 所長 宮 城 恒 彦………… 1
- 修了者及び次期入所予定者、指導講師一覧………… 2
- 職員室は教師を育てる 島尻地区中学校校長会会長
知念中学校校長 具志堅 源 三………… 3
- 研修を終えて 島尻教育研究所 教 育 研 究 員………… 5
- 教育講演 「個に応じる学習指導の改善・工夫」
千葉大学教授 天 笠 茂…………14



随想 心の接点

人間の耳に一番快く響くのは自分の名前である、という。幼い頃から名前は毎日呼ばれている言葉であるし、親が自分の子の名前を呼ばない日は一日たりともないであろう。そして、何十回、何百回と呼ばれていくうちに身にしみこみ、血となり、次第に人格の一部分となって形成されていく。名前を呼ぶということは、その人の人格を認めていることにも通じるものであり、喧嘩の時や興奮している場合には、対象をどのような呼び方をするかを、自分の体験を思い出せば分かるであろう。

名前を覚えることは相手の心の扉を開く鍵になる。人の付き合いは名前を知ることから始まる。初めての出会いには、お互いに名刺を出したり、名乗ったりして挨拶を交わす。ある会社で、渡された名刺を、訪問者が座った順序に並べて、要件を聞いていた社長の心配りに教えられたことがある。さらに、話の中に「今、Tさんの……」とか「これについてYさんは……」とか名刺の名前を引用しての対応の仕方に人柄をしのばせるものを感じた。鈴木健二氏は「嫁と仲良くするには、一日に何回も嫁の名前を言いなさい」と著書に書いてある。

私たち教師は毎年たくさんの子どもたちを送り迎えしながら教育の道を歩んでいる。よい教師の条件はたくさんあろうが、その中で、私は園児・児童・生徒の名前を多く覚えている先生を筆頭にあげたい。教育は心の育成である。心を開く鍵である相手の名前を知らなくては心の通い合う教育は成立しない。ある幼稚園で二百名あまりの園児の名前を覚えていた教頭がいて、修了式に一人一人の名を呼びながら、送り出している情景に接して感動したことがある。また、ある校長が、その子の名札を見て「名前」を呼んだだけなのに、自分の名前を校長先生が覚えていてくださったと、家に帰ってから、大喜びで母親に話していたという小学校一年生がいた。

卒業して数十年後に遭った教え子の名前が、とっさに口から出てきて呼べた時の、相手の笑顔ほど美しいものはない。その子の生徒の頃が昨日のように蘇ってきて、話も弾む。ところが、「あなたは誰だったかね」と問われた教え子は急に他人顔になり、喜びのまなざしがそれてしまう。別れ

てから思い出しても、もう遅い。

ナポレオンは自分の軍隊の連隊長や大隊長の名前を殆ど覚えていたという。隊長たちの一覧表を自分の部屋に貼り、大きな声で読み上げ、そして、書き、また、読み上げた。そのやり方を毎日繰り返したという。白兵戦になると「ジュール大佐の隊は右へ」「ローベル中佐は後方へ」と名前を呼びながら陣頭指揮を取った。最高司令官に自分の名前を呼ばれて感激した隊長たちは自ら先頭に立って突撃し、戦果をあげたといわれる。

毎日子どもたちと顔を合わせている私たち教師は、一日に何回、自分の学級の子供の名前を呼んでいるだろうか。毎時間、出席名簿の名前を呼んで、声をかけているだろうか。特に、受け持つ人数の多い中学校では、生徒の名前を覚えることは指導内容の研究より大事な教師の務めであると信じている。普通の授業で、出席の点検を生徒番号だけでやることは、あまりにも事務的で、血の通った方法ではない。せめて、何番の「〇〇くん(さん)」と、生徒の顔を見ながら呼んで欲しい。番号だけで人を呼ぶ所はどこか、考えてみれば、その意味が理解できるのではないか。

人間は接点が多ければ多い程、心の通り路が拡大され、緊密になる。名前を覚えたり、数多く呼んだりすることは、子どもとの心の接点を点から面へ広げる役目を果たし、「よい教師」の一つの大きな条件を増やすことにもなる。担任や教師に一週間に一度も声をかけられない子の心はどこへ向いていくだろうか。せめて、週末に出席名簿を見て、一人一人の子どもたちの顔を浮かべながら名前を読み上げ、その子との接点の有無を確認することのできる心の余裕を持ちたいものである。

平成10年 3 月

島尻教育研究所長

宮 城 恒 成



平成9年度 後期 教育研究修了者及びテーマ一覧

期数	氏名	勤務校	教科	研究テーマ
後期	1 上原 順子	糸満市立 潮平幼稚園教諭	幼稚園教育	豊かな心を育てるための保育実践をめざして ー幼児一人ひとりが友達との関わりの中で育ち合う援助を通してー
	2 仲里 竹子	南風原町立 北丘幼稚園教頭	幼稚園教育	思いやりを育てる援助の在り方 ー身近な人々や自然との触れ合いの中からー
	3 上原 千秋	糸満市立 喜屋武小学校教諭	国語科	主体的に表現する力を育てる学習指導のあり方 ー2年教材「こんなお話を考えたよ」の作文指導を中心にー
	4 石川 なおみ	糸満市立 潮平小学校教諭	国語科	楽しく読み深めるための授業の工夫 ー物語教材「お手紙」の学習を通してー
	5 平田 勝典	糸満市立 光洋小学校教諭	国語科	「交信する子ども」を育む授業の創造 ー文学教材の学習を通してー
	6 玉那覇 明美	佐敷町立 佐敷小学校教諭	国語科	読書意欲を高める指導の工夫 ー読書記録を通してー
	7 銘 莉 繁雄	糸満市立 糸満小学校教諭	特殊教育	主体性を育てる IEP を生かした学習指導 ー自然の素材の活用を通してー
	8 前里 朱美	東風平町立 白川小学校教諭	道徳	内面に根ざした道徳性の育成を目指して ーモラルジレンマの授業を実践してー
	9 比嘉 智也	東風平町立 東風平中学校教諭	数学科	数学的な見方や考え方を育てる指導の工夫 ー自力解決の場における支援を通してー

平成9年度 指導講師及び担当教科

講師氏名	教科・領域	所属等	講師氏名	教科・領域	所属等
竹本 祐子	国語科	豊見城教育委員会 指導主事	名嘉元 美佐子	幼稚園教育	豊見城村立 豊見城幼稚園教頭
上原 弘子	生活科	南風原町立 翔南小学校教諭	上原 須美子	幼稚園教育	糸満市立 西崎幼稚園教頭
高良 清吉	特別活動	豊見城村立 とよみ小学校校長	大城 早智子	国語科	糸満市立 喜屋武小学校教頭
荷川取 幸代	学級経営	豊見城村立 伊良波小学校教諭	仲里 好子	道徳	糸満市立 光洋小学校校長
知念 清雄	学校経営	南風原町立 津嘉山小学校校長	松吉 洋子	数学科	県教育庁 島尻教育事務所指導主事
安次嶺 敏雄	教育相談	糸満市立 潮平小学校教諭	與座 忠志	特殊教育	南風原町立 南風原中学校校長

平成10年度 前期 入所予定者及びテーマ一覧

期No	氏名	勤務校	教科・幼稚園	研究テーマ
前期	1 宮城 しのぶ	糸満市立 潮平小学校教諭	社会科	社会科における国際理解教育のすすめ方 ー体系的指導をめざしてー
	2 仲里 孝	糸満市立 光洋小学校教諭	社会科	個を生かす学習指導の工夫 ー地域学習の指導を通してー
	3 徳元 ひろみ	具志頭村立 具志頭小学校教諭	国語科	主体的な学び手が育つ学習活動の工夫 ー説明文の指導を通してー
	4 比嘉 史江	豊見城村立 豊見城小学校教諭	図工科	造形的な創造活動ができる授業の工夫
	5 糸数 昌子	南風原町立 津嘉山小学校教諭	図工科	表現力を高めるための指導 ー低学年における絵の指導を通してー
	6 島袋 健	南風原町立 翔南小学校教諭	学級経営	学級の生活問題を議題化し、解決する能力を育てる学級経営
	7 友寄 弥栄子	玉城村立 船越小学校教諭	特別活動	児童会活動の活性化の研究

職員室は教師を育てる



島尻地区中学校校長会会長

知念中学校校長 具志堅 源 三

私は3月で37か年間の教職生活に終止符を打つことになった。思えば、その間私を教師として育て、鍛えてくれたのは子どもたちであり、よき先輩、同僚の先生方であった。

教師という職業は、初任者教師であろうと、先輩教師であろうと、同じように教壇に立ち子どもたちの指導に当たらなければならないのは至極当然のことである。

しかし、採用された当時は喜びと不安、重責が交錯する心境で、毎日が無我夢中であった。指導技術や生徒理解も未熟のまま教壇に立ち、教師中心の授業を展開したのではないか、子どもたちがどの程度理解できているかどうか把握することも不十分であったような気がする。また、生徒指導においても子どもの内面にせまるといふより管理的であったように思われる。しかし、子どもたちとの人間的触れ合いの中で、切磋琢磨しつつ教師として高まってきた感がする。まさに子どもたちは私を支えた師であり、共生し合える友であった。また、私にはよき先輩、同僚との出会いがあった。学習指導や生徒指導、学級経営等で悩んでいたときいろいろと相談にのってくれたり、励ましと勇気を与えられたりもした。さらに、放課後は誰彼となく職員室に集まり、教育談義で、時間の経つのも忘れるぐらいであった。そういう中で先輩方の教育観や教育理念を知り、自分の教育に対する信念や考え方が確立されたと思う。職員室は温もりがありコミュニケーションの場でもあり、人間関係を豊かにする道場である。また、教師としての自己教育力を高める場でもある。

このようなことから、職員室は教育の震源地であると言える。換言すれば職員室の雰囲気は学校教育に大きく影響し、教育効果を左右する要素となると思われる。そこで、今、学校経営で職員室の空気を大事にしているいくつかを述べてみたい。

一つには、教師間の望ましい人間関係を確立するとともに、教育愛に燃える雰囲気を醸成し温もりのある職員室にすることが大事である。さらに、教師集団の凝集力を高めることによって学校教育の充実も図られると考える。

二つには積極的に自己研鑽する場でありたい。(教師としての自己教育力を高める場) 教育は子どもとの人間関係が基盤であると言われている。子どもが好きになる教師は、

1. 子どもが分かるように教える教師
2. 子どもの気持ちをよく受け止め、受容し、共感する教師
3. 人間的な魅力を感じる教師

だと、言われている。そのためには、常に教材研究の深化を図るとともに教師としての識見をたかめ、指導法の工夫・改善に取り組む姿勢と実践力が大事である。とりわけ、教師相互の良さを認め合い、切磋琢磨する教師集団になるように努めることである。

三つには生徒理解のための情報交換を積極的に行い支援し合える場でありたい。生徒指導は生徒理解にはじまり、生徒理解に終わるといっても過言ではない。一人ひとりの生徒を理解するには、いろいろな資料や観察、相談、情報の収集が大切であると言われている。

しかし、教師のものの見方、考え方に相違がでるのは当然のことである。そこで、教師間で情報交換し合い、適切な生徒理解に努めることが大事である。

以上述べたことが職員室の空気としてかもし出し、学校の風土となれば、と常に念じてやまない。

「大切な話」「3分間スピーチ」の時間について



糸満市立潮平幼稚園教諭 上原 順子

島尻教育研究所で学んでみようと思ったのは、「幼稚園現場や、子供達を時には違う角度からみてみたい」と、ほんのささいなことがきっかけでした。念願は叶ったものの不安と希望が入り混じり、複雑な気持ちでした。いよいよ、10月2日、7期生として入所式を迎える日がやってきました。

しばらく続く緊張の中で、通勤途中で見る景色に心をほぐし、何故か心地よいものがありました。朝日のまぶしさに向かう10月頃、ススキの穂にうっとりする11月頃、そして今、あちこちの農道に刈り取られたサトウキビの山々…と楽しんでいる間に、もう修了を目の前にしています。

この6ヶ月間、たくさん学んだ研修の中に、「大切な話」と「3分間スピーチ」があります。私にとっては有意義な研修のひとつです。

《大切な話》

〈大切な話〉は外山滋比古氏の「学校で出来ること 出来ないこと」の中から題材を引用し、全員で話し合うことです。家庭や学校に関すること、教育に関することなどについて、一人ひとりの考えや感想を話し合いました。題材は「学校と家庭の立場」からスタートし、「ゆっくり急ぐ教育」「ブタも木に登る」「しかられたい気持ち」「危険教育」「ケンカの学校」などたくさん話題がありました。まだ慣れぬ頃ピンと張った緊張の糸を所長の一言で笑いを誘い、心が和んだことが思い出されます。上手く話そうとするほど、つじつまの合わない内容になり、話した後で何と浅はかだったと後悔することもありました。私にとって自分の意見をまとめて人前で話すのは、またとないチャンスでした。一つの題材から一人ひとりの受けとめ方や、考え方がたくさんあることに気づき、感動することばかりでした。今までの自分を振り返り、物事を真剣に考えることの大切さ、また、研究員のいろいろな考えから学ぶことがたくさんありました。

まとめは糸満主任指導主事、賀数指導主事からユーモアの中にも温かみがあり、ある時は、先見の明をもって物事を見つめ、ある時は、辛口の言葉を頂き大変勉強になりました。最後の宮城所長のまとめでは、皆の考えを受け入れて下さり幅の広い物の見方、奥の深い話の内容はいつまでも心に残るものがあります。

《3分間スピーチ》

〈3分間スピーチ〉は、毎週金曜日に行なわれます。内容も実に様々で趣味、周りの人から得たこと、人生のこと、調べた物の紹介などと幅広く、これも楽しい研修の中の一つでした。スピーチのポイントは材料次第で決まるそうです。主事から「話し方」の資料が配られ、これを参考にし、相手に伝わるように3分間で発表することです。切り出し→材料→自分の意見で話は完結します。他の研究員の文のまとめ方や、話し方にも人柄が感じられ、学ぶことがたくさんありました。

この6ヶ月間、毎日ほどよい緊張感をもちながら、多種多様にわたり、実に幅広い研修内容でした。今までの教師生活を振り返ることや、物事を広い角度から考えることの大切さなど、言葉では言い尽くせぬほど得るものがありました。私の心を充分耕し、広げてくれたような気が致します。たくさんファイルされた資料の高さと同じぐらい、心に積もるものがあります。

自己に厳しく、謙虚な態度で接していこうと思う気持ちも、研修したおかげだと思っています。

何よりも嬉しく心の財産として残るのは、素晴らしい仲間と出会ったことです。壁にぶつかった時にはお互い励まし合い、笑いの絶えない研究員の明るさに支えられました。

最後に、このような研修の機会を与えて下さった糸満市教育委員会、講師の名嘉元美佐子先生、快く研修に出して下さった園長先生、教頭先生、その他関係機関の方々に深く感謝致します。

研究所で学んだことを心に留め、実践に生かせるよう今後も努力していききたいと思います。

島尻教育研究所の一日



南風原町立北丘幼稚園教頭 仲 里 竹 子

霞かかる2月、いつものように『おはようございます』とあいさつを交わしながら、竹箒を持って朝の掃除をしている。畑の方に目をやると人参の葉の上に霜が降りたのかと思わず「ワァ 真っ白」叫んでしまった。ふとあの東北の情景を思い出しながら、さわやかな気持ちになって研究所の一日が始まります。

8時40分、日直の準備したおいしいコーヒーの臭いに誘われて、辞書等を持ってミーティングルームへ。ミーティングでは、日程の確認、諸連絡、教育、政治、行事や自然など話題が広がり時間が経つのをつい忘れてしまいます。引き続き、月一回月曜日は宮城所長、糸満、山城、賀数指導主事の先生方から講話があります。教育の今日的課題や文章の書き方、読み方・話し方（電話の取り方）・パソコン指導・不登校児への教師の配慮と関わり方など、それぞれの先生の人間味あふれた、丁寧な指導には心うたれ「頑張るぞ」という気持ちがふつつつとわいてきました。

水曜日は「大切な話」の時間。外山滋比古氏の著書『学校で出来ること 出来ないこと』の中から研究員が一つ的话题を選択し、それをもとに学校、家庭、地域をめぐる課題について話し合い、切磋琢磨され自分の視野が広がり、ものの見方、考え方を深めることが出来ました。

金曜日は『3分間スピーチ』で研究員一人ひとりの体験や考え方などを聞き、お互いを知り、認め、支え合い研究員のきずなが強まっていったような気がしました。話の最後は、指導主事の意見、所長のまとめの話があり、人間として教師としての生き方を学ばせて頂きました。

ミーティングの終りは歌声、月曜日は（島尻教育研究所追謡歌）、水曜日（沖縄の歌）、金曜日（研究員の心はずむ歌）研究員の心一つになったハーモニーは、時には隣の振興会の職員からおほめの言葉を頂き、いい気分になって次の自主研究へと向かうのでした。

研究を進めるにあたり、厳しく、温かい言葉かけをしてくださる宮城所長は、手作りの「小冊子」「色紙」「刻印」等をくださり、一人ひとりを大事にされていることに大変感動しました。研究が思い通り進まず、葛藤、疑問、不安でゆきづまった時、親身になって一緒に考え、ご指導して下さった糸満旦男主任指導主事、賀数昌治主事、上原須美子先生には感謝しています。そんな時、図書館から見える一面芝生におおわれた庭、二本の大きなガジュマルの木、二頭の馬、小高い山、数軒のかわらぶきの家などの風景が私の心をなごませてくれました。

研究テーマに沿って研究を進める中で幼稚園、小学校、中学校の検証授業の際には研究員一人ひとりが仕事を分担して参観しました。その後、検討会をもち、初めて聞く言葉にとまどったり、それぞれの研究員の見方、考え方の深さに感動させられ、学ばせて頂きました。「三人行えば必ず師あり」とはまさにこのことだと実感しました。

この半年の研修期間、所長、指導主事をはじめ多くの先生方から指導を受ける機会に恵まれました。すばらしい仲間たちとの生活、振興会の職員の方々との温かい触れ合い、心づくしに現場では経験出来ない数多くのことを学ぶことができ、心から感謝申し上げます。

研究員一人ひとりがニンギョウチカジマーイ（春一番）のように東風（くち）となり、学校、幼稚園、地域で教師としての新風を興し、精進していくことが恩返しになるのではないかと思います。

最後に機会を与えて下さった南風原町教育委員会、南部振興会の皆様をはじめ、ころよく研修に送り出してくださった玉城真一園長、職員に厚くお礼申し上げます。

研 究 の 入 り 口

～検証授業を通して～



糸満市立喜屋武小学校教諭 上 原 千 秋

「環境が人をつくる」の言葉のごとく、島尻教育研究所では多様な人達と出会い、学校現場では難しい体験や所外研修と多くの価値あるものを学べる場所でした。

宮城所長の「研究所での6か月間で学ぶことは、幅広い見識で、弾力性のある考えを持つということ。そしてみなさんの研究は入り口を探し当てること…」という講話を拝聴して、幼稚園2名、小学校6名、中学校1名の研究員は、各自の研究テーマをもとにそれぞれの入り口を模索し始めました。関係する本を読んだり、他の報告書を読んだりしながら机上の研究を進めていったのですが、研究の一番の山場は、なんといっても検証授業ではなかったかと思います。

12月8日、銘苅さんのIEP授業を皮切りに、12月に6名、年が明けて3名が無事検証授業を終えました。検証授業にたどり着くまで苦しい時もあったのですが、仲間に励まされながら乗り越えることができました。

検証授業に至まで

検証授業を行う前に、全員で指導案検討会を行いました。その中でも、幼稚園の日案や、特殊教育の指導案等始めて見る指導方法に意見することもできず、私自身の不勉強を痛感させられました。また、私が適切であると思った指導案も、研究員からの様々な意見や質問を受けることによって、検証授業を行う際、明確でない点が分かり、実際の授業でも大いに役立ちました。そのことは、一つの考えに固執していた私を正すとともに、研究を厳しく見つめ直すよい機会でありました。

子供たちとの出会い

6歳から13歳、年も違えば地域も違う子供たちとの出会いは、とても新鮮で楽しいものでした。研究員に声をかけられ嬉しそうに答える幼稚園生。不自由な手を一生懸命に動かし、目に色を塗る女の子、緊張した中にも小学校とは一味違う雰囲気を持った中学生。校種は違っても、共通していえることは、どの子も生き生きとしていて、活動することに喜びを感じているということでした。

教師が児童一人ひとりの実態を捉え、意欲をかき立てるような教材作りの大切さを、身を持って感じました。

また、検証授業の際、研究員は「教師の指導の観察」「児童の全体的な観察」「抽出児童の観察」という視点を持って参観するので、回数を重ねる度に授業者の研究内容を検討していく目が育ちました。私は、シャッターチャンス逃さぬよう、緊張しっぱなしのカメラマン。という貴重な体験もしました。

検証授業後の反省会では、様々な角度から厳しい意見や助言等もありました。しかし、最後に宮城所長から温かい労いの言葉を頂くと、子供のように嬉しくなりました。そのことは、教師としての活力となり、また、一步前進することができたと思います。

「修・破・離」

所報「東雲」第3号で、宮城所長の随想の「形」の中に芸事が上達する順序として、「修・破・離」という言葉があります。師匠の「かたち」をそのまま修得するのが「修」で、次に師を破り、少しずつ自分なりの「かたち」を創っていく段階が「破」で、さらに、修行を積んで、自分なりの技を生み出して師を凌駕して、離れてゆくところが「離」であると書かれています。

私達9名は6か月の研究生活で「修」の大切さを知り、これから「破・離」へと成長できるよう、息の長い研究を続けていきたいと思っています。

最後に、私達研究員を温かく、時には厳しく指導・助言を下された宮城所長、糸満主任主事、賀数主事、指導講師の先生方、そして、快く研修に送り出して下さいました校長先生をはじめ職員の皆様に、感謝するとともに、このような機会を与えて下さいました関係市町村の方々、南部振興会の皆様にお礼申し上げます。この6か月間で得たことを子供達に還元できるよう、教師として研鑽を深めていきたいと思っています。



社会の中の一員として

—所外研修から学んだこと—

糸満市立潮平小学校教諭 石川 なおみ

思い起こせば6カ月前、不安と期待に胸を膨らませての入所でした。前期の皆さんの報告会での発表を聞いてからというもの、自分にもできるだろうかという不安の方が大きかったのを覚えています。しかし、わからないから勉強するのだと自分に言い聞かせ、研究所に足を運んだのでした。

研究所では、各自のテーマに沿っての研究は元より、所長を始め糸満主事、賀数主事の講話、指導講師の先生方の講話、所外研修、クラブ活動、県外旅行等、不安にかられる間もなく次々と研修が進められ、気が付くといつの間にか6カ月が過ぎていたというのが現在の心境です。

どれをとっても有意義な研修でしたが、この6カ月の間に数々の視察研修ができるということで、不安の中にあっても所外研修は特に楽しみにしていました。実際、たくさんの研修が予定されており、「百聞は一見に如かず」という諺の通り多くのことを学ぶことができました。たくさん学んだことの中から一部を紹介したいと思います。

10月23日

OCC本社 コンピュータについて初歩から説明して下さったので、初心者私にとってはとてもわかりやすかったです。実技講習では、ハイパーキューブを使ってお絵かきを楽しみました。みんな子どもの気持ちになり、真剣に取り組んでいる姿が印象的でした。また、インターネットの操作も教えて頂き、初めて挑戦しました。情報化時代を生きていくためにまず自分がコンピュータを操作できること、それから子どもたちにその指導をしていくことが大切であるということを改めて感じました。

11月6日

沖縄国際センター 1985年にアセアン諸国の「人造り」のために設立され、現在までに127カ国から3,314名の研修生を受け入れているとのことでした。様々な国籍の人達がにこやかに談笑しているのを見て「イチャリパチャデー」を地球規模で実践していることを実感しました。

児童相談所・児童園 2才～20才までの子どもが児童相談所を経て児童園に入所するとのことでした。児童園では、寮母さんの指導の元で仲良く協力して生活している様子が伺われました。引っ越しはまだでしたが、児童園が新しく建て直されすばらしい施設ができていたのはうれしいことでした。

12月24日

TTC（トロピカルテクノセンター） 各企業や会社から派遣された研究員によって、資源を工業的に開発する事業や、情報開発研究等が進められていました。那覇マラソンで使われているスポンジもここで開発されたもので、さとうきびの汁から作られた地球にやさしい商品だということがわかりました。

具志川火力発電所 近代的な設備の中で、石炭を燃やして蒸気を発生させ電気を起こしていました。燃えかすの石炭は、海水で冷却され埋め立てに使われていました。

その他、1月には、クリスチャンスクール、少年院、女子学園、島尻養護学校、沖縄盲学校、沖縄刑務所、2月には、沖縄県議会、那覇家庭裁判所、沖縄県警察本部等を視察、研修させて頂きました。どの訪問先でも、担当の方々が快く迎えて下さり丁寧に説明して下さいました。学校という狭い箱の中に閉じこもりがちであった私にとって、社会という広い視野から教育を見つめ直す良い機会となりました。

お世話になった方々へお礼状を書くことも大変有意義な研修だったと思います。最初は、正式な手紙の書き方も分からず、時間がかかったのですが少しずつ慣れてきました。お世話になった方にはすぐにお礼を申し上げるという社会人としての礼儀も学ばせて頂きました。この6カ月の研修で学んだ色々なことを、教育実践や日々の生活の中に生かしていきたいと思っています。

最後になりましたが、このような貴重な研修の機会を与えて下さいました全ての関係者の方々に心から感謝申し上げます。



“ちゃんぶるうず”が行く

—県外研修・東北旅行—

糸満市立光洋小学校教諭 平 田 勝 典

“ちゃんぶるうずが行く、みちのく秋を満喫する旅”と銘打って、3泊4日の研修旅行に出発した。ちなみに、“ちゃんぶるうず”とは、第7期の研究員が幼稚園、小学校、中学校の先生方で構成されていることから命名されたものです。

この日を迎えるまでに、忙しい研修の合間をぬって、しおりの作成、係り分担、団旗の製作等の準備を和気あいあいとした雰囲気の中で進めてきました。

旅程は、

10月26日（日）

・15時26分仙台駅に到着、八千代観光バスに乗車し青森城址へ。

10月27日（火）

・松尾芭蕉の俳句や日本三景の一つで知られる風光明媚な松島。伊達政宗公の菩提寺とした国宝、重要文化財に指定されている端巖寺や螺鈿細工・すかしぼり・漆の蒔絵と工芸品の感がした藤原家の栄華をいまに伝える中尊寺。磐井川の流れて、石英粗面岩の河床を洗って造り出したみごとな溪谷、厳美溪。独眼竜という異名をとった勇敢で機知に富んだ武将で知られる伊達政宗の歴史館。

10月28日（水）

・62才にして山居7年、真と善と美に生き抜こうとした高潔な高村光太郎の記念館や山荘。賢治の多彩な側面に触れる事ができた宮沢賢治館とイーハトーブ館。故郷の漁民で代用教員として教育に情熱を燃やしつつも、小説を書いていた石川啄木の記念館。お土産にと、もぎたてのりんごをたくさん買ったりんご園。

10月29日（木）

・十和田湖の成因、動物、植物、鉱物等が展示されている十和田科学博物館。外輪山に囲まれたカルデラ湖の十和田湖遊覧。紅葉したカツラ、クルミ、ブナ等の落葉林の間をぬって駆け抜ける奥入瀬溪流。かつて女盗賊の住処だった岩小屋、石ゲ戸。雪だるまを作ったり、雪合戦をしたりと童心に返ってはしゃいだ八甲田山。そして、道中、大変お世話になった黒崎さんと東北の晩秋に別れを告げ、青森空港から沖縄へ。

このように、ハードなスケジュールだったように思うが、見聞を広げる上で大変有意義なものになりました。学校現場にいては、なかなか経験できないこの時期の旅行は、南国沖縄では味わうことのできない東北の大自然の美、食文化、文化財などとの出会いや厳しい風土で暮らす人々の生活史を探り民俗文化を理解する一助となり、多くの感動を得ることができました。また、3人の文学者について詳しく知ることができ、これまでよりみじかに感じました。特に賢治については、実際に花巻の地を踏み、自然や多才な側面に触れることで賢治の持つ不思議な世界やファンタジックな世界が少し感じとれたような気がしました。さらに入所間もない10月の旅行は、研究や緊張感から開放され、寝食を共にし、親睦を深めていく中で、研究員一人ひとりの良さを知るいい機会にもなりました。

3泊4日の旅より十和田湖上遊覧の旅行記を紹介します。

東北・みちのくを楽しむ旅も今日が最終日。午前8時チェックアウトした“ちゃんぶるうず”一行は十和田湖グランドホテルを後にした。湖畔の冷氣の中を襟を締めて歩いていると眼前に外輪山に囲まれた十和田湖が現れた。栈橋から湖を覗いていると透明度が高く、底に沈んでいる落ち葉や枝がはっきりと見えた。湖面は朝日を浴びてキラキラ光り、まるで私たちを歓迎しているかのようであった。「〇〇さん急いで」とせかしながら第一八甲田丸へ駆け込み乗船。船内には既に団体客が見晴らしのいい席を確保し、地方の方言やお婆さんの談笑が飛び交い賑わいをみせていた。午前8時40分休屋を出航。当座、十和田湖の箱庭とも思えるような湖面に点在している兜島、鎧島等の島々の風情を楽しむ。さらに船は十和田湖半島の突端を巡り約1時間の湖上遊覧を終え、子ノ口に接岸した。紅葉は大分少なくなったとは言え、十和田湖周辺の溶結凝灰岩と松の緑、ブナにナラ、カエデ等の紅や黄色の錦の衣を纏った木々とのコントラストが瑠璃色の湖面とマッチし、より神秘的な美しさを醸しだしている。沖縄では、味わえない、東北・みちのくの秋を心ゆくまで満喫することができ感動！

最後に半年間の研修の機会を与えて下さった校長先生を始め、関係市町村の方々にお礼申し上げます。御講話頂いた諸先生方、細かく指導を頂いた指導講師の大城先生、そして、研究所の宮城所長、糸満、賀数両主事には、心より深く感謝申し上げます。



学 び 続 け る こ と

—研修を終えて—

佐敷町立佐敷小学校教諭 玉那覇 明 美

暑さも和らぎほのかな秋の風が頬をなでる10月、初めての長期研修への期待と不安を胸に入所式に参加しました。学校では研究授業を終えたばかり、その慌ただしさで教室に残してきたことに後ろ髪を引かれながらも、半年間の研修の機会が与えられたことは、とてもうれしく思いました。緊張した入所式を終え、研究室の中に入ると整然と整理されたそれぞれの机の上には、前期の研修生からの歓迎のことばと必要な事務用品が置かれ、壁にはきれいに飾られた『入所おめでとう』の貼りがわたしたちを迎えてくれました。その心づかいがとても温かく、研修への気持ちを高めてくれました。

毎日が騒然とした学校現場と違って、研究所では静かで自由な研修の時間が流れていきました。そんな中で「ミーティング」や「スピーチ」、「大切な話」、「レポート検討会」は、ピリッとした緊張の時間でした。「大切な話」や「スピーチ」では学校教育をはじめ家庭や地域、政治・文化などの多範囲な話題がのぼり、“耳薬い、になる話がたくさん聞けました。折しも、中学生のナイフによる事件が多発し、教育の問題が深刻な社会問題となりました。教職という立場にあってそれぞれが真剣に考え、意見交換をする中で私も得るものがたくさんありました。今までの自分の視野の狭さや片寄った考え方に気付かされ、教師としてのみならず人間としての自分を見つめなおす充実した時間でした。学校というフェンスの中だけでもものを考えることの恐さ、謙虚な態度で広く研修を重ねていくことの大切さを痛感しました。

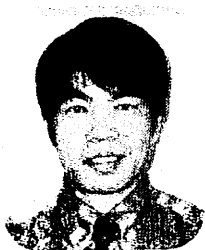
研究をすすめるにあたっては、テーマ、仮説、研究内容、実践といった研究の流れに整合性をもたせることの大切さを糸満旦男、賀数昌治両主事から教えていただき、お人柄からしみ出る親切、丁寧な多くの指導助言をいただいたことを感謝しております。また、指導講師の竹本裕子先生には、研究の方向性を示してくださったり、参考文献の紹介や励ましのことばをかけてくださったりして、一方ならぬお世話になりました。レポート検討会を前に、いろいろな文献を読みあさり、何度も何度も読み返し苦心惨憺の末やっと書き上げたときには、「ここでの研究は出発点である。思い悩む中で今までの錆が落ちていく。」という所長のことばが思い出され、“これでいいんだ、と気持ちが楽になったのを覚えています。読書指導について心ばかりがはやり、暗やみのなかで模索していた自分にとって今回の研究でささやかながらも一灯を得たことは大きな収穫だったと思っています。

半年間の研修で、よき指導者に恵まれ、楽しい仲間に出会えたこと、そして講師講話をはじめ立派な先輩の先生方の講話を聞くことができたこと、貴重な多くの所外研修の機会を与えてくださったことをありがたく思っております。そのどれもが新鮮で楽しく意義のあるものでした。その中で、教師自身が学んでいく姿勢についての示唆を得たような気がします。

『進みである教師のみ、教える資格あり』『教師は学びつつ子どもとともに歩む』のことばを胸に留め、子どもの心にかかる先生をめざして、研究所で学んだことを学校現場での実践に少しでも生かしていけたらと思っています。

最後に、これまでの研修を支えてくださった関係各位の方々に心より感謝申し上げます。

ありがとうございました。



夢と希望に胸ふくらませて

=入 所 式=

糸満市立糸満小学校教諭 銘 莉 繁 雄

『天高く馬肥ゆる秋』は、食の秋、読書の秋、スポーツの秋と、一年中で一番充実した季節です。また、秋は空も澄んで高く見え、人の心も夢や希望に溢れる心境にさせます。そのような季節の中で入所式を迎えられる研究員は幸せであると思いました。秋晴れの天気、花壇には秋桜の花が咲き乱れ、研究室の壁には「入所おめでとう」の文字が掲げてあり、各机には前期の研究員の励ましのメッセージが書いてあって、感謝の念で一杯になりました。

研究員の胸のコサージュが正装した服に馴染んでいっそう凛々しく見えました。その反面、顔の表情は緊張感と僅かな不安が交錯しているような感じがしました。日頃は、平常心でいる先生方も緊張する場面があるのだな、と思いました。そのような雰囲気の中で平成9年度後期島尻教育研究所第7期生の入所式が行われました。

園児や子供たちを学級に残して、後ろ髪を引かれる思いで研究所にきた先生方。「学級での教育実践の課題を解決して子供たちのために頑張るぞ。」そのようなことが入所式を前に脳裏をかすめたことでしょう。

二日目の入所式の朝、ミーティングがありました。はじめに、研究所内の職員の紹介があり、研究員との係わりの説明を聞いて、私たちの研究がスムーズにできるようご配慮などのご苦勞が分かりました。お互いに連携し合い協力して仕事をしていくことが大事であると思いました。その後、研究員の自己紹介があり、みんな緊張したおももちで、一人ひとり研究の経緯などを語っていました。その話の内容は、研究に対する情熱がひしひしと感じられるものでした。次に、所長講話があり、話の中に「今日から、先生という言葉は使わないように」との言葉があり、今日からは教えられる側になって、謙虚な気持ちで指導を受けたいと思いました。児童生徒の心理を理解するためのよい機会だと思いました。最後に、諸連絡があり、環境整備や入所式会場設営等の連絡を受け、すべて自分たちの手作りの式典になりました。午後になり、来賓の方々も次々に列席し、会場は緊張感が漂っていました。みんなの顔も朝の顔とは変わって真剣そのものでした。島尻教育研究所「逍遙歌」の入場曲の流れる中を、夢と希望を膨らませて入場しました。来賓の方々の挨拶や祝辞などがあり、これから6カ月間の研究に対する励ましの言葉などを賜り改めて、研究に対する目的意識が強まってきました。

式終了後、研究所の一日の日程や所外研修、研修旅行などの説明がありました。聞いている内になんとか研究が楽しくなってきました。毎日、三線があり、また毎週水曜日は舞踊の練習があります。日頃、学校では絶対にできないことが毎日できるのです。研究員の親睦や自分の趣味を広げる絶好の機会です。

また、日頃、行くことのない施設見学や講演会等への参加も計画されて、教師としての資質や知識を伸ばすよい機会であると思いました。一番の楽しみは10月下旬頃の、「東北旅行」です。目的地が未知の場所なので全員大喜びでした。旅行に行ってみ聞を広げ、研修の成果を教材研究に生かし子供たちに還元したいと思います。旅行を企画した方々に感謝申し上げます。

入所式が終わっていろいろと経験したり聞いたりしている内に一抹の不安も消えて楽しく研究に取り組める気持ちが高まってきました。「一年の計は元旦にあり」「6カ月間の研修は入所式の日にある」、をいつも心の隅におきたい気持ちです。研究に行き詰まった時は、「入所式の日を原点に、(初心忘るべからず)」の心を大切に、6カ月間研修に研鑽してきました。

6カ月間、研究員を温かく見守って下さった宮城所長をはじめ糸満主任指導主事、賀数指導主事、各指導講師の先生方、研究所の職員、関係者の方々へ厚くお礼申し上げます。



素晴らしい先生方との出会い

—所内研修について—

東風平町立白川小学校教諭 前 里 朱 美

島尻教育研究所での研修は、テーマをもとに研究するだけではなく、「所内研修」「所外研修」「三分間スピーチ」「大切な話」等、自分の視野を多方面に広げる機会を与えて下さったように思います。

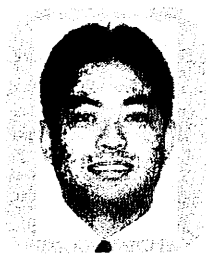
所内研修は、所長とお二人の主事の講話が毎月一回ずつ組まれています。所長からは、社会の変化と教育の流れについて、紀行文、文章の読み方、書き方等を教えて頂きました。私が特に印象に残っているのは、文章の書き方の講話です。それは、書き方の基本として留意することや構成の仕方を話した後に、実際に文を書く場を与えて下さったからです。長さ—1,000字以内、対象—父母、時期—学期の始めの想定で、内容を①私の教育観②このような学級にしたい③いじめをなくすには④このようなことに協力して下さいの、中から選び、2時間以内にまとめるという課題でした。文章を書くことが苦手な私は頭を抱えながら仕上げたわけですが、体験を通して自分の考えをうまく伝えるための書き方が分かってきました。また、全ての作文に所長自ら添削して下さい、文の書き方だけでなく一人ひとりに対する丁寧な指導法の大切さも学ぶことができました。

糸満主任主事には、教育法規や教師として身につけておきたい素養、事務手続きの在り方、学級経営に対する考え方等を教えて頂きました。いつも小話や雑学、小テスト等を交えながら温かい雰囲気の中で講話をして下さいました。先生のお話は、学校現場でも即実践に活かせるものが多く、特に学級経営に関するお話しは「こんなこともしてみたい。」「あんなふうにしてみようか。」と次の実践に向けて意欲が湧いてくるものでした。また、事務手続きの在り方は知っているようで見落としていることが多かったことが分かりました。糸満主事の幅広い教養は人を引きつける魅力があり、教師として人間性を高めることが大切であることを学ぶことができました。

賀数主事には、パソコンの基礎的知識と基本的操作を初級コースと中級コースに分けて教えて頂きました。パソコンについては最初、苦手意識がありましたが表計算やグラフ、会計簿の作成等を通して、パソコンの便利さを改めて感じる事ができました。先生はよく「パソコンを早くマスターするためには、触ってみることです。」とおっしゃっていましたので、学校現場での事務処理にも活用し、教育活動にもゆとりが持てるようにしたいです。研究発表会に向けて、分かりやすい発表の仕方の講話では話をする側の技法について多くのことを学ぶことができました。

その他にも、応用教育研究所研究主事でいらっしゃる宮良用倫先生の「標準テスト」、山城直三先生の「心因性による登校拒否の対応について」も、先生方の専門としている分野において直にお話を聞くことができ、有意義な研修となりました。

短期間でこのような充実した研修を受けることができたことは、これからの私たちの財産となりました。そして、今後少しでも多くの子どもたちに還元できるよう努力していくつもりです。関係各位の方々に感謝申し上げます。



自分を高められた貴重なお話

—講師講話について—

東風平町立東風平中学校教諭 比 嘉 智 也

島尻教育研究所に入所して、早6カ月が過ぎようとしています。そこで、研究所での研修を終えるにあたって、これまでのことを振り返ってみました。私の当研究所を希望した動機は「半年ぐらい現場から離れてみたらどんなものかな」「時間があって、普段できないことができるかな」という、とても甘いものでした。そのため最初のうちは、何をどうやって研究するのかさえも決まらずに、自分の力のなさを痛感し、悩むことがありました。そんな中で、所長をはじめ主事の先生方のお話を聞くことによって、励まされ、徐々に目の前が開け、そして自分の進む道を見つけていくことができたのを憶えています。さらに、講師の先生方からも素晴らしい講話を聞かせていただきました。そしてそれも、私にとってあらゆる面において力となり、教師としてのレベルアップにつながったように思えます。

講師の先生方の講話は、それぞれの専門的な分野においての実践や、これまでの豊富な体験からのもので、とても興味深く、私達にとって貴重なお話ばかりでした。「ことばと心の豊かさ」「私の保育雑感」「信頼される教師でありたい」「国語科の研修を通して」「学校図書館を活用した学習指導」「今でも忘れることのできない文言」「学習指導の工夫・改善」という演題でお話をしていただきました。その内容は、幼児教育を通して得たこと、学級経営においての思いやりの心の育て方、教科においての実践を通して得たこと、自分の体験の中で今でも心に残っている言葉、個に応じるための学習指導などで、すべてが、教師として、これからの指導に生かすことのできる重要なお話でした。また、管内の校長先生の講話として、西崎中学校の屋良朝計先生、知念中学校の具志堅源三先生に「私の歩んだ教員生活」「教師として自己懺悔」という演題でお話をしていただきました。生徒指導を通しての生徒理解や、教師としての姿勢や人間関係づくりについてのお話で、生徒と教師や教師同士のよりよい関係づくりのために、何が大切かをあらためて知ることができました。

日頃私達研究員は、幼稚園、小学校、中学校とそれぞれ別々の畑で教育活動に頑張っています。そのどの畑にも先生方のお話は、とてもいい肥やしとなり、これからの教員生活の中で必ず実となっていくと感じました。また先生方の豊富な知識もさることながら、人間味や情熱にあふれた人柄や、私達に対して温かく接してくれた態度にも感激させられました。先生方のおかげで私達も、自分自身を内面から高められる貴重な研修ができました。それは、これからの成長のためにも大きな財産となりました。また、私自身も、講話の度にこれまでの実践を反省することができ、4月からの現場において、今まで以上に充実した教育活動が展開できそうな自信が湧いてきました。

最後に、6カ月という短い期間で、これ程までに中味の濃い研修を経験できたことは、私にとってたいへん有意義であり、また本当に幸せなことと感じました。この研究所での研修の機会を与えて下さった関係各位の方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



「個に応じる学習指導の改善・工夫」

平成9年9月17日

千葉大学教授 天 笠 茂

教育の流れ

教育界の今のキャッチフレーズとは何か、それは生きる力ではないか。神戸の事件からは心の教育に変わりつつある。それと新しい学力観でしようか。以前は自己教育力が使われていた。先生方の頭の上をこれらの新しい言葉が次々に通り過ぎている。しかし、学校の姿、教育の姿とかはこの10年間どう変わったかというと実はあまり変わっていない。視線を落として身の回りのことに目を移すと現実はなかなか動いていないことに気がつく。ある意味では子どもが難しい状況に変わりつつある。それが、学校崩壊、学級崩壊等の言葉となって新聞・雑誌などでよく見られるようになった。その様な教師のコントロールが効かない事例が身近に見られる。比較的教師が若いときにその様な状況になることはあったが、今は、経験の程度を問わない、自他ともに実力を認められている先生が、子どもの状況に対応できなくなり、学級が荒れてくることも出てきている。学級経営の上で子供達の気質とのずれが来ている。その様な難しい状況に教育の環境が移っている。

先生にとって授業をすることとはどういうことなのか、授業をどのように作り上げていけばよいのか。そのような話をしていきたい。個に応じる指導とは、10年前から言われていた。しかし、どれだけ具体的にされてきたでしようか。個に応じる指導と言われたときに先生方は、どんな方法を持っていらっしゃいますか。今日は、その様なことを話したいと思います。

I 授業についての自己診断

今日の1時間目の授業はどんな授業でしたか。なにをめざす授業でしたか。（授業自己診断カードの内容説明）このカードの中の5つの項目は、学習指導の改善の観点でもある。授業者としての先生の自己評価と受け取っていただきたい。

こちらにいるみなさんがこのカードに個々に○をつけていただくような傾向になるでしようか。他県でのアンケートを見ると「ディベートを取り上げた授業をしてクラスの4分の3は活発に意見交換できたが、残りの4分の1は発表できなかった。」とある。ディベート形式で個に応じるとはどう

授業自己診断カード		[]月[]日[]校時
(1) 授業の学年[]年	(2) 教科等[]	
(3) 授業の概要		
はんぶん とてもよく よく はんぶん あまり ほとんど		
①課題意識・問題意識を持つ場を用意する。 -5---4---3---2---1-		
②目標の自己選択や設定をする場を用意する。 -5---4---3---2---1-		
③学習方法の自己選択や設定をする場を用意する。 -5---4---3---2---1-		
④学習成果を発表する場を用意する。 -5---4---3---2---1-		
⑤自己及び他者を評価する場を用意する。 -5---4---3---2---1-		
(4) 本時についてのコメント		

ということかがテーマからでてくることになる。個に応じた授業と言うときに授業が盛り上がったという事で評価をするのではなく、“参加できなかった子どもへの対応はどうするのか”まで配慮されなくてはならない。全体的傾向として、中学に比べて、小学校では指導上の工夫は多彩である。自己診断カードの蓄積をしていくと、自己診断ができ、自分の指導上の傾向が出てくる。今このようなことが必要になってきている。常に問題意識を持たせる続ける授業や、常に自己評価とか、発表が続くとかの授業は考えにくい。単元の中で、発表はまとめとかに集中させたりしている。年間を通してこのようなことについて対応した授業ができているのかがわかる。一斉授業も必要である。しかし年間を通して同じ様なスタイルで授業が続いたとしたら子どもは飽きるのではないか。ある時は、一斉指導も必要、課題選択も必要、発表も必要である。一斉指導か問題解決学習か授業の手法や方法を二者択一の形で子どもに迫っている。それらの学習方法をバランスよく保つ方がよい。全体として、先生の授業はどういうバランスをしているのか。それがポイントである。これまでどちらか1つに統一しようとしてきた傾向がある。このようなカードを取ればバランスを保つ上で参考になる。

Ⅱ 授業改善の求め

1 個に応じる学習指導と教育方法の多様化

一斉指導をなくすのは問題である。しかし、一斉指導だけでやっていくやり方も問題である。それは、子どもは考えなくても先生が出す情報を受け入れていけば授業が成立するようになるからである。それが子どもと先生の立場を固定化してしまうそのようなマイナスのものも含んでいる。

個に応じた指導というと、どんな方法でやっているでしょうか。個に応じた指導として机間巡視の徹底や丁寧にやるとか、個別ノート等に記入することがあると思う。確かに計画的に個に対応しているが、グループ活動なども広い意味での個に対応したことになっているのではないか。発表する場面、子どもに何かを選ばせる、学習内容を選ばせることも個に応じた指導にしても良いのでは。個に応じる対応という机間巡視やノート指導だけではなく、もっと指導方法の多様性があってもいいのではないか。学習指導の多様性をいかに確保していくかが授業改善のポイントになる。

2 授業改善のポイント

良い授業とは、次の4点が備わっていると考える。

1つめは意欲が掘り起こされる授業です。先生の授業を振り返って子どもはおもしろそうだなと思っていたでしょうか。年間を通して子どもは何回くらいおもしろそうだなと思っていたくれたでしょうか。先生は次に何をやるのかなとか、先生がポケットから何を出すのかなと子どもに思わせる方が意欲が大切だとか言うよりも効果がある。これが授業で意欲を育てることにつながる。これを出すと驚くだろうなと考えながら教材研究をする。意欲を大切にするのは何よりわかるということだろう。

2つめは子ども自身が考える場面があったかどうかということです。何か発見するとか見つけるとか判断するとかにポイントがある。どうせ先生が教えてくれると子どもに思わせると自分で考えることができなくなる。様々な授業があるなかで自分のいったことが全て答え

になるそんな授業がある。発見のある授業も大切なのではないだろうか。

3つめは共に学ぶこと。個別化というと先生と生徒が一人一人に指導することになりがち。個ということの中にも背景としては、共にとか、一緒にと言うことが現実にある。集団に合わせるために神経をすり減らすとかの問題があるので、学校が持っている集団性は改善する必要があるが、学校の将来の姿としては、人と人が一緒にやる、人と人が共に学ぶことに学校の持ち味を見いだして行くべきだろう。一人一人が考えることの基盤は共に考えることにある。学校というところはいろいろな人、関係者をつなげていくところであり、そこに学びの場を作り上げていく。学ぶということは人と人との触れ合いをもとにしている。

4つめは子どもが自分を表現すること。今日の授業では、子どもが自分を表現する時間はあったらどうか。発表することの必要性がある。自分を表現するには、言葉で、身体で、歌で、文章で表現する子もいるし、その子の特性に応じてさまざまなものがある。その子にとって一番いい表現方法がある。40人いれば40の適当な表現方法があり先生はそれを把握して、伸ばそうとしているだろうか。先生の働きかけはどうだったかを反省することが必要。

3 授業改善のポイント(2)

(1) 総合的な学習と課題意識の育成

課題をどのようにとらえるかが問われる。廃油から石けんを作る授業で教師の立場からすると国語や社会・理科など教科は分かれていても課題はつながっているが、子どもの立場からするとあくまでも教師の論理の中のことである。子ども達の中から課題が出てくる事が大切であり必要である。

(2) 課題解決学習について

次の4つの段階がある。先生が子どもに課題を与える、先生が選択肢を与える。子ども自身が考える。4つめとして、先生と子供が共に課題を作り上げる。今まで一斉授業しかやっていないのに、「さあ今日から課題学習だ。課題を自分で作ってやってごらん。」と言われても子どもはとまどってしまう。課題解決学習をやる前に、このような段階を踏んでから始める必要がある。

(3) 情報受信型から情報発信型へ

これまでは先生から発信された情報をたくさん受信できる子どもが優秀な子どもであった。少ししか受信できない子どもは成績の悪い子どもと評価されてきた。沢山の情報を取り入れた子どもがどれだけの情報を発信できたかという観点で見たらどうだろうか。3つしか得ていなくても3つとも使いこなして外に発信できる子。10受けいれても自分の中にしまいこんで表には出さない子ども。伝えた物を子どもがどのように使いこなしているかがまさに生きる力そのものである。受信したかしなかったかで授業が終わっていたが、むしろ子どもが授業で受信したことをどのように自分の物にしているかを評価することが、指導法研究のポイントにならなければならない。

Ⅲ 授業風土の転換

1 “めだたない” “みんなと一緒に” ということ

教師はどう受けとめているか、教師と子どもとのやりとりが授業の一般的なやり方。年齢が上がると受け答えがうまくいかない。わかっているが発表をしないと、わざと間違える。他の仲間から浮かび上がることをいやがる。目立とうとしない傾向がある。どうして子どもの心を開かせていくかが教師の課題となっている。国際化社会に於ける日本人の弱さと重なっている。担任が一人一人を逆に目立たせる学級経営はいかなる物か。このようなことをすることが大切になっている。授業の風土を壊してやる、子どもを精神的に解放してやる必要がある。子どもだけではなく社会全体にもその様な傾向はある。そういう中で、将来を考えた場合、できるだけ開かれた、安心できるところで生きられるようにする必要がある。その一つが自分の意見を持つことである。ディベートは自分の意見を持たせるうえで適切な手法なのかどうか。

2 “教室は間違えるところ” ということ

『教室は間違えるところだ』という詩が掲げられている教室がある。生徒の答えが明らかに間違えている場合、攻撃が加わってくる雰囲気がある。そこに子ども同士の評価のきびしさがある。ちょっとした言葉で雰囲気が変わるが、教師がそのまま授業を流してしまった場合、子どもは体験として、傷つくことを学ぶ。単なるスローガンとして掲げたら子どもはすぐ見抜いてしまう。今の子どもの心理状況（目立たない、みんなと一緒に）の中では、かえって水面に石を投げるような試みである。今は間違えない教育をしているが間違える教育も意義がある。間違えながら人生を学ぶこともある。どちらかという間違いをさせることに臆病になったりさける傾向がある。授業の1つの場面においても工夫する中で間違いを認め合うその様な授業風土を作り上げることが今求められている。

Ⅳ 個に応じるチームによる教育

1 総合学習と個に応じる指導

多様ないろんな物がある。その1つにチームがある。途中で選択がある場合でも1人の先生より2人の先生がよい。ある学校の例として、一方は問題意識を大切にして、総合学習を取り組みたい、だからそれぞれの学級でやり、個に応じた指導をしたいと主張した。もう片方の先生は、それをどうして学年で（4人で）、一人一人に対応した方がより問題意識に迫れるのではないかと。一人一人の課題意識を大切にしたいなら学年で取り組んだ方がより課題に迫れるのではないかと。担任よりむしろ隣の先生がより課題に対応できるのではないかと。これまでは、総合学習は1人の先生が1つの学級に1つの単元に取り組んでいた例が多かったように思う。そうなると一人一人の課題意識がどうなったかとかはあまり表に出てこなかった、指導組織そのものを柔軟にしていける必要がある。

2 総合学習の時間を支える人的条件

これからはもっと色々なテーマが出てくる。学校の中の先生だけで対応できそうですか。時代の新しい課題を受けとめるには色々な人の力をかりる事が必要なのではないかと。地域の人と協力して課題を解決する方が新しい学校のあり方として望ましいのではないかと。これか

らの学校は、色々な人を取り込むことができるかそのような力を持っているかが問われてくる。学校の中で教師間の協力関係がうまくいっていないくて、バラバラな状態であれば、協力してくれる人が学校の中に入って一緒にチームを組むことはできないだろう。外から人を呼んでくるには学校の中の体制を整える必要がある。学校の中にチームワークがあるからこそ、専門的な人も呼んでくることができる。

3 個に応じる学習指導とチームティーチング

第1段階では算数を中心にチームティーチングが行われているが第2段階では、他の教科で行われるようになる。第3段階にいけば、地域の人々の協力を加えてできるかどうかになる。第4段階として、TTは終わった、次は総合学習だという捉え方ではなく、TTの発展した先に総合学習があるという捉え方をする。

4 ティームティーチングの発展

TTを発展させていくことは総合的学習の時間と重なっていく。TTを積み重ねていけばそのまま総合学習になっていくその様な方向性は大切。中学では教科のなかでのTTだが、複数の教科のTTを考えてはどうだろうか。民族音楽では、社会と音楽と言うように、中学では1つの教科より複数の教科の先生がそれぞれの専門を生かして、内容を絡ませながらTTの研究していった方が発展性がある。それが総合学習へつながっていく。

V 学習環境の設計

1 問われる授業の構想力

授業はスタートする以前にすでに勝負は決まっていることもある。幼稚園はその手法である。当日は子ども達だけで進めていく。個に応じることは発問研究や指導法だけでなく環境設計もある。今日の授業の机の配列はいかがだったでしょうか。机の配列は目的を達成するために必要な物だったのでしょくか。必要ないけどそこにあったから使ったのか、工夫されたのか、あまり検討されずにそのまま置かれていたのか、どうでしょうか。これからは机の位置や動かし方も大切になってくる。

2 プロデューサー、コーディネーター、アドバイザーとしての役割

これらは教育界からは別の世界の言葉である。これからはこういう役割も必要になってくる。全てを先生がというよりも、いろんな人に協力していただく、理科室にはこんな物がある図書館にはこんな資料がある、これらが先生の頭の中にあり、整理されそれらが活用できるような設計が描かれている。先生が教える内容を全て知らないといけないと言うのではなく、詳しい人を知っていると、どこにいけばその様な情報が得られるとか、を知っていて必要に応じて子ども達にアドバイスしていくことができる。このような役割が現代的な課題に対しては必要になってくる。

文責 島尻教育研究所 賀 数 昌 治

島尻教育研究所図書室の紹介

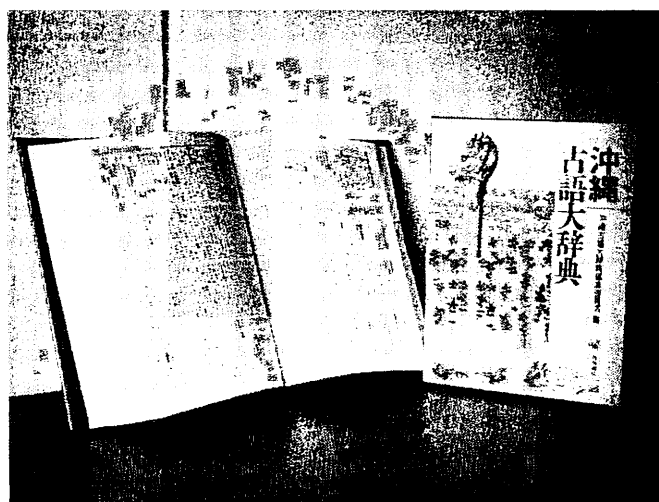
島尻教育研究所には全国各研究所の研究紀要、教育関係図書、雑誌類が保管されています。また、辞典類には、特に力を入れ収集していますので、必要な場合は、当研究所の図書室をご利用下さい。前回に引き続き辞典類の紹介をします。

沖縄古語辞典

発行所 角川書店

昭和44年の構想以来、26年間をかけて完成した沖縄古語の辞典です。本編には漢字や方言による読み、文例などが納められています。

他に資料編には、音韻、文法、方言の特徴、芸能用語集などが掲載されています。



大漢和辞典

発行所 大修館書店

昭和34年の初版発行いらい2回の修訂をかさねて、全12巻の大漢和辞典となっています。



毛筆・硬筆 書写辞典

発行所 講談社

小・中学校の書写教育は、国語科の指導として行われています。国語科の指導目標に沿って書写指導の目標も定められています。本書では、現行の学習指導要領に準拠した学習内容の配列がなされています。したがって、直接に学習指導要領を参照しなくても、本書の内容を参考にしながら、学習することによって、自然と現在の学校教育における書写指導のねらいを達成することができます。

